

京都市環境審議会 第4回京の環境共生推進計画評価検討部会
議事摘録

日 時 平成23年1月26日(水) 午前10時～11時40分
場 所 職員会館かもがわ2階中会議室
出席者 小幡部会長, 板倉委員, 遠藤委員, 徳地委員, 中川委員, 長谷川委員
欠席者 大久保委員, 奥原委員, 松本委員, 深尾委員

内 容

1 開会

2 議題

(1) 第3回京の環境共生推進計画評価検討部会の内容の整理について

- ・事務局から資料1について説明。

(意見なし)

(2) 京の環境共生推進計画の中間点検について

- ・事務局から資料2について説明。

(板倉委員) 天然林の保全のところ、**「京都市域に原生林は存在しない」**とある。原生林の定義にもよると思うが、本当に京都市域に原生林はないのか。合併した旧京北町や、八丁平、大悲山などはどうか。

(小田切環境総務課係長) 原生林を「ある程度昔から現在まで、伐採や災害などによって破壊されたことがなく、またほとんど人手が加えられたことのない、自然のままの森林」と定義すると、担当課に確認したところ、京都市域には存在しないということである。

(板倉委員) 一度でも手がいいたら原生林ではないということか。

(小田切係長) そういう理解である。

(板倉委員) 実際は原生林のようなところもあるが、確かに、昔、二次林になっている。

(3) 平成22年度版 環境レポート案について

- ・事務局から資料3について説明。

(中川委員) わかりやすく、楽しく読める。写真やイラストが入り、今までより活字は多くない。写真と活字がうまく調和されている。Q&Aも読者の理解を助ける。

(小幡部会長) 文字のポイント数が大きく、字が少なくなり、確かに読みやすく、わかりやすくなった。

(板倉委員) p8に京北自然体験ツアーの記載がある。このツアーではないが、森林インストラクターの会のガイドが、「今まで京都市には原生林はなかったが、京北町を合併したことで、この原生林(片波川)が入った。」と言っていた。原生林に該当しないか、再度、担当課に確認して欲しい。

(小田切係長) 産業観光局林業振興課に確認したところ、市域には原生林はないということ

あった。

(板倉委員) p14, 「みんなで探そう 京都のいきもの」にカワニナの写真がある。カワニナはもっと細長い感じで、この写真ではサカマキガイと間違えられるかもしれない。もっといい写真があれば替えて欲しい。

(小幡部会長) カワニナの写真は変更して欲しい。

(松本環境企画部長) 京都府の天然記念物が載っているデータにカワニナの写真があると思う。

(長谷川委員) 京大の芦生の森は原生林ではないのか。ガイドの方も言っていた。

(板倉委員) 芦生の森は原生林であるが、京都市外、前の美山町である。

(徳地委員) 芦生の森も原生林とは言い切れず、「原始的」な林と言っている。日本で、特に近畿地方では人の手のはいついていない森林というのはほとんどない。

(長谷川委員) 環境レポートは前進したところがたくさんある。より見やすく、より興味を持ってもらえるような形になった。

p3 の家庭からの二酸化炭素排出量は、平成 15 年から平成 16 年にかけて増加してそのままである。平成 15 年が特別に低かったのではないのか。155 万トン is 正しいのか。

どうしたら減らせるのか、155 という数字は本当に達成可能なのか。電気を消す程度 of 取組でこれから 10% 下げられるのか。目標値に縛られていつまでたっても達成感を味わえないのは、かえって辛い。目標値をもう一度見直したらどうか。

(小幡部会長) 排出係数も関わってきているし、少人数で暮らす人が多くなっていること等もあり、なかなか減らない。

(的場環境総務課担当課長) 夏が暑かったのか、冬が寒かったのかによっても変動するが、便利さを追求する中で、化石燃料、電気・ガスをより多く使う生活になっていることが影響しているのではないのか。また、エコポイントは省エネ型製品への買い換えを促すのが目的であるが、買い換え時により大きなテレビを買ってしまう等により省エネ効果が相殺される部分がある。

核家族化の影響もある。京都市も人口は減っているが、所帯数は増えている。1 人暮らしが増えることで、一家に一台ある家電製品も増加している。市民一人ひとりがライフスタイルを変えていくことから始めていく必要があると感じている。

産業部門については、省エネ設備導入、企業の活動の中で効率性を追求する中で減少している。

自動車については、ここ数年で京都にも大きなショッピングセンターができ、車で乗り付けてたくさん買って帰ってくるようになった。市民生活の実感として、ライフスタイルの変化が、いろいろな面で現れてきているのではないかと感じている。

(小幡部会長) 排出係数の影響がある。原子力の割合が増えれば減少するが、それでよいのか。

新計画の 25% 減少も大変である。何か戦略はないか。

(遠藤委員) 常に意識しておくことが大切だと思う。常に意識する、忘れずにいるという意味で、数値はこのまま設定しておくほうがよい。

カーシェアリングを使ったが、なかなか予約できなかった。担当者に聞いたところ、電気自動車の試乗のためのもので、カーシェアリングとは別に考えて欲しいとのことだった。現場とのずれがあるのではないか。

p6 の「梅小路公園 検索」はいいと思う。最後のページにまとめるのではなく、小さくてもいいので他のページも欲しい。

(小幡部会長) 「無料で利用いただくカーシェアリング事業」と掲載されているが、これはカーシェアリング事業として実施されているのか。

(松本部長) 行政としては、CO₂ 排出量が非常に少ない電気自動車を体験していただくという趣旨で、この事業を実施している。i-MiEV は販売当初、一般の販売がなく、市民が乗る機会がないと思われたため、提供して体験していただくという趣旨で始めた。本当のカーシェアリングをやっていくのは民間ベースになる。カーシェアリングは電気自動車でもよい。行政主導で、京都市がカーシェアリングを全市でやりますということはない。

京都市の電気自動車は台数もある程度あり、平日も利用できる。以前は土日のみだったため、利用がもっと集中していた。

2020 年の 25%削減。新しい計画を策定中であり、目標達成のための取組も含んでいる。

(小幡部会長) カーシェアリング事業の目的は、カーシェアリングそのものか、電気自動車の普及か。

(遠藤委員) カーシェアリングの文字が出すぎている。電気自動車のお試しという形で出すほうがわかりやすい。

(的場課長) 目的は次世代自動車を普及促進することであり、それをカーシェアリングという形式で貸し出しさせていただいている。

(小幡部会長) 順番待ちがあるということで、人気があるのは間違いない。

(遠藤委員) 乗った結果は、充電器探しの旅になった。急速充電器を使用しないと、4 時間もかかる。乗り心地はよかった。

(松本部長) 充電拠点は 40 箇所ある。高速であれば、30 分で 8 割まで充電できる。インフラ整備も含めて徐々に普及させていきたい。

(徳地委員) カーシェアリングは電気自動車普及事業としたほうがいい。

困った顔のマークなどの説明は、p9 ではなくもっと前に必要である。

言葉遣い。p3 の「温室効果ガス排出量の約 95%が二酸化炭素排出量なんだよ」というのは、「約 95%が二酸化炭素なんだよ」ではないか。p10 の「京町家の知恵」は、何が知恵なのかよくわからない。「夏を涼しくする坪庭など」ではないか。p9, 「京都議定書誕生の地である京都において、私たちの」ではなく、「私たちの…。京都議定書の地である京都において、環境負荷を低減するために」だと思う。p11 の「河川の水質汚染に対する対応(川にフェンスを張り拡散を防止)」も何のことかわからない。アトラクティブにはなっているが、言葉の使い方には気をつけて欲しい。

また、フォーマットが微妙に違う。重点プロジェクトの Q & A は、下線部があったりなかったり、全てフォーマットが違う。フォーマットがわかれば読み飛ばせるので、フォーマットはなるべく変えないで欲しい。

「特集 いのちの森」も、重点プロジェクト 3 の特集ではなく、全体の特集だという位置付けがわかるようにして欲しい。

(小幡部会長) p6 の特集は、重点プロジェクトと同等なテーマであるということでここに取り上げており、違うタイトルのほうがいいのかと思う。

全体としてスペースに限界があるが、わかるような形、誤解のない形で言葉は修正いただきたい。

(4) 京の環境共生推進計画における進ちょく点検結果の総括案について

・事務局から資料4について説明。

(中川委員) 民生・家庭部門二酸化炭素排出量について、やはりライフスタイルの転換が必要であると思う。便利な社会に慣れてきているが、環境家計簿は有効である。意識して取り組んでいけば減っていくものであり、継続していく必要がある。

(小幡部会長) 民生・家庭部門、民生・業務部門は条例に沿った対策ということだが、ライフスタイルの見直しを積極的に進めることは条例にも書かれているのか。

(松本部長) 条例にも書いてあるし、新しい計画でも書く。ライフスタイルの転換なしに、家庭からの排出量を劇的に減らすことは難しい。

(小幡部会長) ライフスタイルの転換は記載しておいたほうがよい。

(長谷川委員) 取組は進んでいないのか、取組は進んでいるが大きな効果が出ていないのか。増やさないと精一杯なのではないか。反省ばかりではつらいのではないか。

(遠藤委員) 製品を作って、買って、処理するまでに、どれだけの CO₂ が出るのかを示すカーボンフットプリントという仕組みがあり、これが市民に浸透すれば、同じ値段だったらこちらにしようという選択肢が出てくる。目に見えるところで意識付けしてもらえるとありがたい。

新京極で朝早くに京都市環境局の車がクラクションを鳴らしながらすごい勢いで走っていた。市が発信する言葉と現場とのギャップは、市民として不愉快である。引き締めをお願いしたい。

(小幡部会長) カーボンフットプリントの件は、「経済の発展と二酸化炭素排出量削減の両立」に広い意味でははいるだろう。環境と経済の両立については具体的に書ければ書いていただきたい。

(徳地委員) p1、長期的目標1の「課題」で、「市内総生産や製造品出荷額が減少したことによる要因ではなく」とあるが、これらが要因ではないという理解でよいか。

(的場課長) 昨年環境審議会でも意見があったが、経済が成長しながら CO₂ も下がるということである。市民に誤解のないように、言葉の表し方は工夫したい。

(徳地委員) 長谷川委員も言っておられたが、取組の結果、劇的に二酸化炭素が減らせるか。環境レポート案 p3 の心掛けようの取組に関して、京都市で CO₂ 排出削減のためのページがなかったか。

(松本部長) 環境家計簿のことか。

(徳地委員) 環境家計簿で確認して、次のステージに誘導しないといけない。⑦として「ホームページで確認しましょう」、あるいは「環境家計簿 検索」とあったほうがよいのではないか。

総括 p2。「一般廃棄物再生利用率は年々上昇」「プラスチック製容器包装による資源ごみ収集量の増加」。しかし、目標設定が厳しいから、取組が進んでいないとされている。これは、取組が進んでいないのではなく、目標値が厳しいから。取組が進んでいないと言われ

ると納得がいなかい。前向きな感じにして欲しい。

(松本部長) 表現は検討したい。

(小幡部会長) 再生利用率の表現は考えて欲しい。上がっていることは書いて欲しい。悪いわけではない。事実は事実として必要である。

p2の京都市農林行政基本方針にはどのようなことが書かれているのか。

(小田切係長) 10年後の京都市農林業が目指す姿として、農業では「持続的な農業収益の拡大、元気な若者への世代交代、農業の持つ様々な魅力や機能の再発見、農林業が中心となった生き生きとした農村集落の再生等」、林業では「持続的な林業収益の確保、グローバルな視点を踏まえた地域産材の商品化・林業生産、林業を目指す人が従事できる環境等」が掲げられている。

(小幡部会長) 新しい目標が出ると、どんどん厳しいことをやっていくことになっており、京都市はよくやっているという印象を受ける。

(徳地委員) p20の環境関連施設利用者数は、平成14年を基準にすると減っているが、平成18年からは増えている。総括はいつを基準にしているのか。

(松本部長) 基準年度は平成16年度、環境関連施設利用者数は平成17年度である。

(板倉委員) 以前は教育委員会経由で人が多くの来館があったが、今は工夫して人を増やしている。

(松本部長) 必修から選択制になった、花背山の家は4年生はなくなり、5年生は宿泊になっている。事務局でも延べ人数で把握できないかという話はしている。

(小幡部会長) 文章で書くか。なぜ横ばいなのか、定量的には横ばいでもその内容を書いてフォローするなど工夫をして欲しい。

(板倉委員) p21のこどもエコクラブは、国の事業仕分けで予算がなくなったので、来年度は0になるのではないか。京都市に継続する気があれば継続できるが、全部、環境省からのお金だったため、きついと思う。

(小幡部会長) 数値だけでは表現できない部分を文章でフォローし、環境審議会への報告としたい。

3 閉会